第 75 回　松江城天守の桐の階段

（1）桐の階段

松江城天守が実戦本意の城と紹介される場合、「石落とし」や「鉄砲狭間」などとともに、「松江城天守の階段は桐でできており、敵が攻めてきた際に階段を取り外せるように、軽い素材の桐を使用した」という趣旨の話を時折聞く。

『松江市史』別編 1「松江城」を編集する過程で、しばしば松江城天守を調べる機会に恵まれたが、そんなある日、ふとこの頑丈で重厚な階段を本当に引き上げることが出来るのだろうかと思い及んだ。確かに桐材は、日本の木材の中では最も軽い素材とされるのだが…。

松江歴史館の宍道正年先生が 2012 年（平成 24）に著された、『親子で学ぶ松江城と城下町』では、小学 6 年生のマアちゃんの質問にお父さんが答えるという形式で松江城が丁寧に解説されている。その中で、

「マアちゃん、建物の中では、刀ははずして手に持って上り降りしていたんだよ。この階段は天守閣にまで退却してきた城兵にとっては最も重要なんだ。中まで敵兵が攻め込んできたときのことを想定して、この階段は木材の中で最も軽い桐で作っているんだ。例えば、この１階から２階へ城内の兵が逃げ上がった後、この階段は軽いから、取り外して２階へ引き上げればいい。そうしたら敵兵は２階へ上がれなくなってしまうよ」という、お父さんの説明が展開される。（〔61〕軽い桐の階段～取り外して時間かせぎ～）

では、「松江城の階段は桐でできており、敵が攻めてきた際に階段を取り外せるように、軽い素材の桐を使用した」というような話は、どのように展開されてきたのだろうか。『松江市史』別編 1「松江城」が刊行される以前の、代表的な松江城関連の書籍から記述を抜き出してみよう。

●島田成矩 1985『松江城物語』松江城物語（4）松江城の特色

「二層から五層にかけて桐の階段がある。他の城郭には見られぬ松江城独特の造りである。足触りも良く、腐食もない。天下一の絶品である。」（中略）「実戦的な防備に力を入れており、実戦の銃眼、長期戦での備蓄、非常事態では軽い階段を持ち上げる、といった実戦的な天守閣であったこと。」

●河井忠親 1967『松江城』第二章第三節天守閣の構造とその築造 4、松江城天守

「一層から四層の各層にある階段は厚さ十糎、幅一・六米の桐材を用いてある。この桐の階段は足触りよく、磨滅しかね、そして防火・防蝕のためにもこれ以上の材料は求められない。のみならず万一落城の悲運に遭遇し愈々自刃しようとする時、階段を引きあげ各層の連絡を断つという様な場合、軽くて操作がし易いなどの点もあり、まことに天下一品というべきもので、他の天守閣に於ては全く例のないものである。」

●1955『重要文化財松江城天守修理工事報告書』第二章修理工事の概要、第四節修理仕様概要二、木工事（二）内部造作

「各階の階段（手摺共）中四階の躍場より五階に通ずる階段のみが松材製で、その他の階段は桐材製でいずれも在来のものを修理し、（後略）」

どうやら、1955 年刊行の『重要文化財松江城天守修理工事報告書』では「四階の躍場より五階に通ずる階段のみが松材製で、その他の階段は桐材製で…」と、材質を報告しているが、河井忠親 1967『松江城』では「桐の階段は足触りよく、磨滅しかね、そして防火・防蝕のためにもこれ以上の材料は求められない。のみならず万一落城の悲運に遭遇し愈々自刃しようとする時、階段を引きあげ各層の連絡を断つという様な場合、軽くて操作がし易いなどの点もあり…」となり、島田成矩 1985『松江城物語』では「二層から五層にかけて桐の階段がある。（中略）非常事態では軽い階段を持ち上げる、といった実戦的な天守閣…」と展開している。そして、冒頭

紹介した宍道正年 2012『親子で学ぶ松江城と城下町』のように、「１階から２階へ城内の兵が逃げ上がった後、この階段は軽いから、取り外して２階へ引き上げればいい。そうしたら敵兵は２階へ上がれなくなってしまうよ」と言う説明が、半ば常識のように語られてきたのだ。

河井忠親 1967『松江城』が述べるように、「足触りよく、磨滅しかね、そして防火・防蝕のため」と言う説明は正しいのかもしれないが、実際の階段を見る限り、「この階段は軽いから、取り外して２階へ引き上げればいい」というマアちゃんのお父さんの説明には少し無理があるのではと思っている。（宍道先生ごめんなさい）

桐材で出来た階段は松江城天守の特徴の一つではあるが、「実戦本意」と強調したかったのだろうか。まことしやかに話が展開する過程が興味深い。「階段」だけに、いつの間にか「怪談（あやしいはなし）」となったという落ちである。

【左】地階と１階をつなぐ階段、【中】寒さに凍える樹種調査（２階と３階をつなぐ階段）、【左】４階と５階をつなぐ階段と躍場

（2）４階より５階に通じる階段

2016 年（平成 18）１月５日の雪が降り積む夕刻、松江市史専門委員の渡辺正巳さんと二人、人けの途絶えた松江城天守内の階段に向かって寒さに耐えながらうずくまっていた。階段材の樹種調査のためである。前記のように、松江城天守の桐の階段は広く知られるところではあるが、別編「松江城」の編集に併せ、科学的な分析を行ってみようと思い立ったのだ。

調査成果は、渡辺正巳・吉野殻 2017「松江城天守の用材樹種調査 1（階段）」『松江城調査研究集録 4』にまとめらており、樹種同定の結果は【表１】（PDF）のとおりである。地階から１階、１階から２階、２階から３階、３階から４階の階段材は、一枚を除けば、全て桐もしくは桐の可能性と分析された。一方、４階から中４階の躍場、躍場から５階（天狗の間）の階段材については、栗もしくは栗の可能性があるものが大半を占め、椎の木属、松属などが混じっている。樹種調査の結果によれば、１階から４階までと、４階から５階までの階段材は大きく異なることがよく分かる。また、階段の造りを見ると、４階から５階までの階段には蹴込み板が付いており、１階から４階までとは異なっている。何故だろう。

思いあたるのは、延宝７年（1679）頃に記録されたとされる「竹内宇兵衛書つけ」（松江市指定文化財）の「松江城城郭の部」に描かれた天守各階の平面図である（別編「松江城」P662～663）。「竹内宇兵衛書つけ」には所々に朱書きの修正（見せ消ち等）や追記が認められるが、本コラム第 54 回「初期松江城天守と千鳥破風」及び和田嘉宥・稲田信 2017「初期松江城天守の形態に関する試論」『松江市歴史叢書 10』で指摘したように、「竹内宇兵衛書つけ」の朱書きは、元文３年（1738）から寛保３年（1743）頃の天守大改修後の情報を記した可能性があり、天守平面図に描かれた階段にも朱書きが認められる。

天守平面図の階段描写を詳細にみると、墨書で描かれた階段は、全て上階側の平面図に描かれており、下階側の図には描かれていない。例えば、１ 階平面図には地階とつながる墨書の階段が描かれるが、地階平面図には１階につながる墨書の階段は描かれていない。しかし、地階平面図には１階につながる朱書きの階段が描かれており、後に書き加えられたものと考えられる。

「竹内右兵衛書つけ」天守の記述部分【左】地階の平面図、【中】右から１・２・３・４階の平面図、【右】５階の平面図

このように見てみると、４階平面図には３階とをつなぐ墨書の階段と、中４階の躍場及び躍場への階段が朱書きで描かれている（5階平面図には中４階は描かれていない）。他階の階段表記と併せて考えると、天守４階平面図中の中４階の躍場及び躍場への階段は、後に書き加えたもの、つまり、天守大改修後の階段の姿を伝える可能性が想定される。現在の４階と５階をつなぐ２つの階段と中４階の躍場が後の改修により設けられたものと考えると、樹種調査で判明したように１階から４階までと４階から５階までの二つの階段材が大きく異なることと符合する。

さて、「松江城天守内の４階より５階に通じる階段と躍場は、元文３年から寛保３年頃の大改修後の姿を伝える可能性がある」ということを述べたが、あくまで「竹内宇兵衛書つけ」の天守４、５階平面図と樹種調査からの類推であり、天守改修前は４階と５階をつなぐ階段は長くて一本だったという確証があるわけではない。こちらの方も「怪談（あやしいはなし）」なのかもしれない。今後の研究課題の一つとして問題提起をしておきたい。

（松江市史料編纂課長／稲田信／2018 年７月９日記）